

臨床検査技師のための医学英語 第2版 実用会話・文献の読み方

奈良信雄・西元慶治 著



訪日外国人の急激な増加に伴い、京都や浅草だけでなく、病院の検査室でも外国人を見かけることが日常的になった。すでに外国人の患者さんの採血や生理検査を担当して、そのコミュニケーションに苦勞した経験のある臨床検査技師の方も多いのではないだろうか。さらにメディカルツーリズム、すなわち外国人富裕層による日本の高度医療に基づいた治療や人間ドックの受診が、病院の収益向上のために促進されており、外国人受診者は増加することが予想される。特に2020年の夏はオリンピック・パラリンピックが日本で開催されるため、診療所などにも外国人が受診する可能性がある。

一方、臨床検査の研究面でも国際化は進んでおり、病院の検査技師も業務での新知見や研究成果を積極的に海外の学会で発表し、英文原著論文として報告することが推奨されている。最近では日本国内で開催される学会でも、外国人参加者にも理解できるよう、英語での発表を指定されるセッションもある。検査技師も研究に積極的に関与し、研究のレベル向上のために英語力が求められる時代となっている。

こうした臨床検査の国際化が進むなか、臨床医や医学研究者向けの医学英語の参考書は多数出版されているにもかかわらず、臨床検査技師向けの良書は2000年に出版された「臨床検査技

師のための医学英語」以外にほとんどない状況であった。このたび、「臨床検査技師のための医学英語 第2版 実用会話・文献の読み方」として、待望の改訂版が出版された。この改訂版では、2015年から検査技師が行ってよい行為として認められた、インフルエンザでの鼻咽頭粘液試料採取の際の会話の流れなども追加された。さらに、本書を読みながら、パソコンやスマートフォンでネイティブの音声を聞くことができるようになった。また、全体の構成や各ページのレイアウトも初版よりわかりやすくなっている。

検査室にいるあなたの前に、外国人患者さんが採血に来た時、「採血してよろしいですか？」程度は言えても、「アルコール綿でかぶれたことはありませんか？」や「駆血帯を巻きます」は言えるだろうか？ また、本書は和文と英文を併記するだけでなく、どのような言い方をすれば、患者さんに気分良く、誤解のないように伝えられるかが解説の欄に詳細に書かれている。病院や診療所に勤務する臨床検査技師にとって、本書は必読の書である。

(東京医科歯科大学 臨床検査医学・検査部 教授
東田修二)

<B5判/154頁/本体2,300円+税/医歯薬出版/2019>